

## サンクト・ペテルブルグ国立大学訪問記

人文学部・大学教育機能開発センター

齋藤 陽一

2009年の11月上旬、佐藤学務部長、吉井管理係長とともにロシアのサンクト・ペテルブルグ大学を訪問した。目的は、ロシアの大学における一般教育（教養教育）のあり方、外国人留学生の教育環境の視察である。センターの年報では、「世界の大学改革事情」という連載があったのだが、前回、中断してしまった。もとより大学教育の専門家ではないので、通り一遍の紹介しかできないが、場合によっては来年度以降につなげてもらおうと、訪問記をこのシリーズの中で書かせて頂いた次第である。

サンクト・ペテルブルグ大学は、1724年に創立された大学で、現在20の学部を抱えている。日本であれば文学部に統一されている哲学や歴史も、それぞれ、哲学学部、歴史学部として独立しているの、いきおひ数は多くなる。キャンパスは、主に、ネヴァ川によって中心部と隔てられたワシーリエフスキー島のあちこちに分散していて、法学部はプーチン首相（元大統領）や現大統領のメドヴェージェフが出たことでも有名である。本校のそばには、ロシアの学問の父とも言えるロモノソフの銅像が立っていた。実は、モスクワ大学を創立した人だが、サンクト・ペテルブルグ大学でも学長を務めたことがある。

ロシアの大学制度については、主にロシア人教師から聞いて、大学に入るまでの教育（こうした教育を行うところを総称して「シュコーラ」と言うが、英語なら「スクール」にあたる語である）が11年であること、大学教育は5年（現在は4年の所も）で、多くの学部を要する総合大学（ウニヴェルシチェート）の他に、専門的な教育を施す単科大学（インストゥート）が力を持っていたが、現在では総合大学の方が上であると見られるために、「ウニヴェルシチェート」と名乗る大学が増えてきたこと、研究の領域では大学だけではなく、アカデミーの研究者が活躍しているということなどを基礎知識として持っていたが、サンクト・ペテルブルグ大学が名門中の名門であるということも、また聞いて知っていた。

最初に訪問したのはロシア言語、文化インストゥートで、あちこちに留学生を受け入れる部署があったものを次第にここに統一しているというお話だった。そのためここでは、東洋学部、文学部（以上の2学部が新潟大学人文学部と部局間交流協定を結んでいる）、ジャーナリスト学部留学してくる学生と、ここに最初から登録する学生にロシア語を教えている。最初に対応してくれたのはロシア語教師でもあるレ

ヴェンコ先生（写真左）と事務スタッフであるファチナさん（写真右）。



日本からの留学生も含め、勉強終了後には、統一テストを受けることになり、多くの学生は、6段階あるその第1段階を目標として、進んだ学生は、第2段階のテストを目指す。新潟大学では、現在、日本で伝統的に行われてきた検定を単位として認めるということを行っているが、この標準テストの世界展開とともに、こちらも考慮する必要があるかもしれない（センター長としての立場を離れ、ロシア語教師としての訪問目的は、実はここにある）。このセンターの協力校として、日本の大学では上智大学と筑波大学の名前が挙がっていた。

印象として、日本の学生はやはり会話が苦手とのこと、また、総じて東洋の学生は文法がよくできるとのことだった。留学生への勉強以外のサポートとしては、近郊の町への遠足や博物館見学など、また、バルチカというビール工場への見学もあるそうだ。その後、発展部（ロシア語の直訳だが、仕事の内容から考えると、企画部とか、将来構想部といったところだろうか）の副部長のカラトウイシェフ氏と会った。サンクト・ペテルブルグ大学では、現在、外国人に対するロシア語標準テストを作成するという任を担っており、モスクワとは独立した形で進めることができるのだと誇らしげに語ってくれた。このテストの説明のために世界のあちこちに出かけていくという氏は、精力的な人物だった。

さらに、新潟大学から留学している女子学生が聴講しているクラスを二つ見学。その内の一つは約10人のクラス、日本の授業の内容で言えば、「ロシア語会話」の授業ということになるだろうが、文法の授業である

可能性もある。「どのくらいの予定で（期間で）」という表現を使って、学生達が文を作りそれを発表、それに対して教師がコメントをしていくというスタイルで授業が進行していった。その文もクラスメイトに対して投げかけられる質問になっており「どのくらいの予定でフランスに帰るの？」などという文になる。それを教師は次々とさばいていくのだが、2個か3個というのがノルマだったが、「私は4個作った」と誇らしげに言う学生がいたり、例文を使って「どのくらいの予定で結婚するの？」とジョークを飛ばす学生もいたり、いたって自由な雰囲気ですべては行われていた。文法的な内容は、新潟大学のロシア語の授業に比べて、著しく高いという訳ではないが、それを実際に使える文にして次々とこなしていくので、そしてロシア語でコメントが付くので、実践的な訓練をやっているなどという印象をもった。また、「インターナショナルな雰囲気になるように努めている」という説明をあらかじめ聞いていたのだが、クラスは、ヨーロッパ、アジア、南米など様々な国籍の留学生から構成されており、ロシア語の習得のみならず、国際交流の場としても役に立ちそうだと感じた。

センターの見学を終えて、歩いて別のキャンパスに向かった。案内してくれたのは、東洋学部で日本語を教えている荒川先生という日本人の先生である。

まず、キャンパス内の施設を見学。メンデレーエフ博物館を飛び込みで見学させてもらう。メンデレーエフがいかに勤勉であったか、それでいて「メンデレーエフの水曜日」という表現があるほど、定期的に友人を招待し、幅広い交友関係を結んだということを知る。展示されているテーブルには訪れた文化人のサインが残っており、著名な詩人や画家の名前もあった。説明をしてくれた女性は、最後に、「実は、メンデレーエフの息子の逸話がオペラ『蝶々夫人』のできごとのモデルなのだ」と話してくれて、眉唾ものかとも思ったが、そうしたこともあって我々日本人に対して、あまり時間がなかったにもかかわらず丁寧に説明してくれたのだと合点がいった。

東洋学部の授業は、当初、いわゆる教養科目がどのように開講されているのかを見たいと言っていたのだが、時間の関係で廊下からのぞくだけになった。「廊下からのぞく」と書いたのは、教室が、ガラスか硬質のプラスチックか分からないが、透明な素材で囲まれているからで、それぞれの教室で授業を受けている学生が少人数であることに感銘を受けた。その後、日本語学科の主任であるルイビン先生の授業（専門科目）を見学。3年生の日本語の授業だったが、古文の否定の表現を、様々な言い方を例に習得するというものだった。

例えば、「働かざる者食うべからず」とか「転ばぬ先の杖」といった表現を学生に読ませて、その意味を聞いていく。最後には、古今集の和歌や百人一首を学

#### 否定形

ず→ ○（な）、ず（に）、ず、ぬ、ね、○  
ざり→ ざら、ざり、ざり、ざる、ざれ、ざれ

井の中の蛙大海を知らず。

転ばぬ先の杖。

転がる石には苔が生えぬ。

上は授業で配られていたプリントの一部を  
コピーしたものを

生に暗唱させる。こうしたことは日頃から行われているらしく、配られていたプリントに印刷されていた和歌以外にも百人一首の暗唱が始まり、私も、うろ覚えながら一緒に唱和した。

そのあとで、中国語担当のロジオノフ先生により教育システムの説明を受けた。サンクト＝ペテルブルク大学では、3つのタイプの科目が設定されており、国家により決められた一般教育科目、大学が決めた一般教育科目、そして、大学で設定する専門科目がある。最近、サンクト・ペテルブルク大学とモスクワ大学とに限って、国家による科目の設定の縛りを緩くするという法案が通ったということで、グローバル化による世界を相手にした大学間競争に対応したのだろうと解釈した。



左からロジオノフ先生、筆者、ルイビン先生、  
佐藤学務部長、吉井管理係長

最後にバスに乗って学生寮に向かい、その見学をした。新潟大学からの留学生の部屋を見学させてもらったのだが、まず、中に入る段階で厳しいチェックがあり、安全面に配慮が行き届いているという印象だった。部屋は、コンパクトな二人部屋で、料理も自分の部屋でできるようになっていた。

学生たちと新潟に戻った時の再会を約して、寮を出たときには、すでに暗くなりつつあった。表の気温は、まだ11月であるのに、零下。冬になっても健康に気をつけて成果をあげてほしいものだ。